

# 私の一冊

こども学科 副島 里美 先生

重松 清 著 『きみの友だち』

小鹿図書館 913.6/Sh 28

あなたにとって「友だち」はどんな意味を持ちますか？保育園や幼稚園では、就学を前にした6歳児が「1年生になったら友だち100人できるかな」と歌っているように、日本では「友だちが多い」ことが善とされています。この影響なのか、インターネットなどの世界では、「ぼっち」という言葉も多く使用されるようになりました。そして、その大半は「友だちができない・孤独な子」というイメージを醸し出しているのです。

しかし、どんなに多くの友だちがいても、「本当の友だち」を見つけることはとても難しいように思います。特に思春期～大学生の時には、“私はこんな生き方をしたい”、“他者に認められたい”、などの気持が高まります。そのため、自分と異なる考え(感性)を持った人に対して、反抗したり、粹がってみたり、仲間外れにしたり…それが高じていじめに発展する…などの事象も発生することがあるのです。反対に、友だちから“外されて”一人になることを恐れるあまり、自分とは全く異なった考えの友だちに同調することもあります。そんな弱虫の自分を認めたくなくて、誰にも相談できずにもがく姿も見られます。

社会の中には、様々な外見や価値観を持った人が存在します。育った場所が異なれば、身体的な特徴が出てきますし、言葉や文化(宗教・食べ物・芸術など)が異なれば、価値観も異なって当然です。しかし、私たちは、「自分が体験したことがない事柄」を想像することは大変難しい。外国に行ったことがなければその土地の文化を感じることは難しいし、病気になったことがなければ、その苦しさを理解できません。しかし、そのような体験をした人の話を聞き、会話をすることで、その人の気持に寄り添うことはできます。人間には、「経験」と「対話」が必要とされています。皆さんも多くの「体験」や、多くの人と「対話」する中で、“人間力”を身に付けてほしいと望みます。

この本は10の短編で構成されていますが、一人の女子が中心となって全編が展開されています。それぞれの主人公は、誰もが思春期～大学生の時代に経験するような揺れ動く気持ちを抱えています。友だち関係に悩んだ時、これから対人関係の仕事に就こうとする人に、是非読んでいただきたい本です。そして、現在のようなSNS社会の

中で、どのような友だち関係が「善」であるのか、自分なりの答えを見出してほしいと思います。